

新しき出発によせて

北田 耕也

『宮原誠一教育論集』の刊行にあたって、佐藤一子さんは編集助手をつとめた。

著作リストの作成という大変な基礎作業があった。編集委員たちによる収録論文の取捨選択、各巻の内容構成、解説担当者の決定という仕事がそれに続いた。甲論乙駁、容易に決定をみぬ日もあったが、次の会合までには議論はきれいに整理されて、しっかりした原案が用意されていた。佐藤さんあっての、とどこおらない『論集』の完成であった。ちなみに、起用の提案者は藤岡貞彦氏である。

『論集』の完結は、ユニークな社会教育研究者の出発を意味した。やがて、『イタリア文化運動通信』が世に問われた。

周知のごとく、これは近代以降のイタリア文化運動の歴史的発展過程をふまえ、「イタリア文化レクリエーション協会 (ARCI)」の文化プログラムと特質を詳述したもので、西欧の事情に暗い私は、文字通り目をみはる思いがしたものだ。新鮮な処女作は、広い目配りを基に社会教育と民衆文化の両端を結ぶ研究姿勢の骨格を造った。

以下、(単著にとどめるが)『文化協同の時代』、『生涯学習と社会参加』、『子どもが育つ地域社会』、そして、『現代社会教育学』と、一すじの道が歩まれる。

「一すじ」といったが、佐藤さんの研究の足跡は単線ではない。(イタリアを中心にすえて) はば広く国際的動向を見すえた成人教育・社会教育の比較研究は、長野県・飯田をはじめとする国内各地の調査研究と結びついている。おとなの学習・文化の究明は、子どもの教育や文化の考察と切れていない。宮原誠一先生から受けついで「アクション・リサーチ」という方法は、「文化協同」という民衆文化創造の方法に発展している。宮原先生が「信濃生産大学」に力をつくしておられた頃、いつかここにアジア・アフリカの青年たちも加わるような理想をもらされたことがあったが、それは、かたちをかえて実現している。

激しい政治的季節の到来である。政治的対処は無論必要だが、現実沈淪する政治を根底において凌駕する詩的精神がなければならない。それは現実を超えることの内に、新しい現実・新しい詩を創る。

憲法の理想の実現は、「根本において教育の力にまつべきものである」といったその教育は、詩のごときものであろう。詩に必要なのは詩論であって、まちがっても政治論ではない。そして、詩論もまた詩である。

大いなる学理は詩のごとし、といった河上肇のことばを思い浮かべている。出典が出てこない退学老人でも、『貧乏物語』や『自叙伝』が「詩」であることは忘れていない。教育の「詩」が興らなければいけない。

「教育権」「学習権」の学理があった。「権利としての社会教育」の理論があり、「地域に根ざす社会教育」の実践があった。そして、「文化協同」である。

佐藤さんの「詩」はいよいよ熟して、そして退官である。これはしかし、新しき出発を意味するのではないか——。民間、在野で、自ら育てたアジアの若い研究者たちも交えた「文化協同」が続行されるだろう。そこには、先師の夢も息づく。すばらしいことだ。